錦織監督

映画の現場から

デジタルとアナログ③

最先端に惑わされず

●○●5

150年以上も前に発明された技術が、今でも社会の中枢で人々の生活を支えているという事例は数多くあるだろうが、映画技術もその一つ。しかし、ほとんどの国で現在もフィルムが使われているのに対し、日本映画の8割がコスト面で有利なデジタル撮影に移行している。

アメリカでは、将来的なことを考え、テレビドラマもいまだにフィルムで撮影されている。日本と比べると目先の利益にとらわれない姿勢が際立つ。最新のデジタル技術を駆使しても、アナログのフィルムの足元にも及んでいないという事実に驚かれる方も多いと思うが、フィルムがいまだに映像の王様であることは紛れもない事実だ。

奥出雲に残るたたらの製鉄技術は匠（たくみ）の技として今も継承されているが、そこで作られる玉鋼は鉄としての純度が高く、コンピューター制御の最新溶鉱炉であっても精製するのが容易ではないという。技術を守り伝えているのは、和紙と同じで、ここでも〝必要だから〟だった。現代のハイテク技術が、古代から伝わるアナログ技術にいまだ及んでいない事例の一つ。フィルムが発明される時代より、はるか昔の技術が今も生きていることに、感動すら覚える。

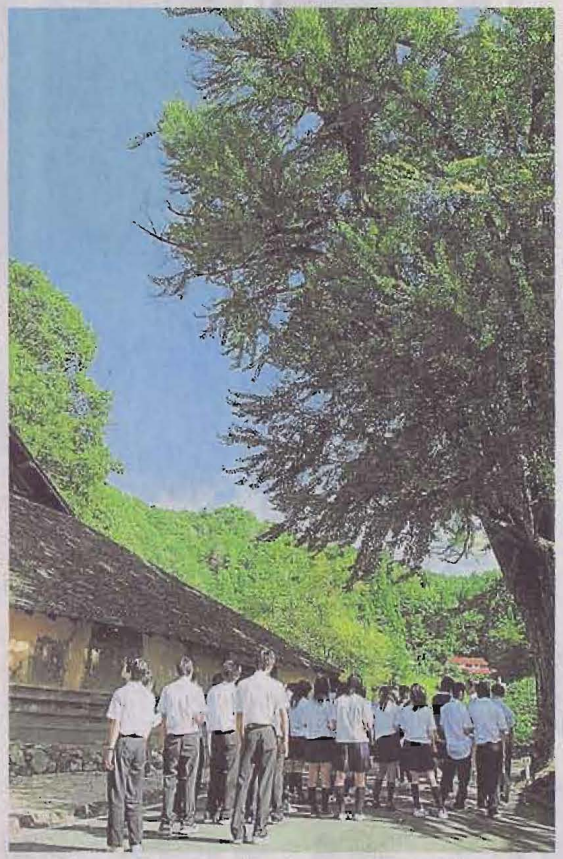
先進技術が万能であるかのような既成概念に翻弄（ほんろう）されてはいけないと、あらためて思う。日本という島の根っこ、根の国であるわがふる里は、古代から継承されてきた財産が多く残る場所。それらを、わずか半世紀のうちに積み上げてきた価値観で軽々に〝仕分け〟してはいけないと、教えられているようだ。

日々の生活に慣れ、多くのことに疑問を持たない、凝り固まった既成概念にとらわれた人が増えてしまうと、われわれの生活は将来取り返しのつかないことになるという危機感が募る。

豊かさとは一体何か、という答えは先人からのメッセージの中にあるのかもしれない。大げさかもしれないが、古代から綿々と続く伝承が、私たちの行く末の羅針盤のような気がしてならない。

（錦織良成・映画監督）

＝第2、4金曜掲載＝



古代からの贈り物　雲南市菅谷たたら（映画「うん、何？」撮影現場から）